オアシス都市「ワルグラ」のマイクロヒストリー

文学研究科　修士課程　2 年
天野　佑紀
フランス
2019 年 9 月 2 日～2019 年 9 月 11 日

計画の概要

19 世紀末に西欧列強がアフリカ大陸を人為的な境界線で「分割」したのち，第二次世界大戦後の植民地独立期を迎えると，同大陸では「分割」された版図を継承する形で多くの主権国家が成立した。報告者はこれまで，文献史学的手法を用いてこの問題を検討するため，かつてフランス植民地 (1830-1962)であった大陸北西部の国，アルジェリアを取り上げて研究を行ってきた。現在執筆中の修士論文においては，植民地化以前に明確な帰属政体をもたず，独自の習俗を維持してきた共同体の事例としてサハラ砂漠に位置するオアシス都市「ワルグラ」を取り上げ，同地に住む人々が画一的な体制下に置かれるまでのプロセスを明らかにすることを目的としている。

かような背景を持つ本調査では，植民地化以降のワルグラで従事したフランス人駐在官が書き残した報告書などの一次資料を収集することを第一の目標とした。駐在官は，担当する行政区の治安維持や徴税などの任務を行ったうえで，月毎の社会状況を報告書としてまとめ，アルジェリア総督府をはじめとする各行政機関に送信した。それゆえ，彼らが書き残した報告書は，ワルグラの社会状況をダイナミックかつ子細に伝えてくれる点で，本研究の根幹をなす基礎資料となることが期待される。

成果

計画通り，ヴァル＝ド＝マルヌ県に位置する国防史編纂局にて，今後分析予定の一次資料を収集した。また，滞在期間に制約があった本調査では，植民地期の終盤にあたるアルジェリア戦争期 (1954-1962)の文書に対象を限定した。渡航前の段階で，オンライン上で閲覧可能な文書目録に目を通していたため，到着後は円滑に調査に取り掛かることができた。しかしながら，紛失してしまっている資料が予想よりも多かっただけでなく，閲覧可能な文書にかんしても散逸が激しく，数回にわたる資料請求を経てやっと目標物を発見する，といったことがしばしばであった。報告者は本調査より前に，フランスの別の文書館で調査した経験があるが，そこでの資料は時系列順に整理された状態で保管されており，目標物の特定に取り立てて苦労することはなかった。但し，その時に収集したのは主に民政官が書き残した公文書であったが，今回報告者が調査したのは軍人が書き残した報告書であったた

め，資料の性質が大きく異なる。これらの保存状況に見られる相違は，アルジェリアの独立が眼前に迫る中で，報告書の集積地であったアルジェリア総督府やフランス軍内部で大きな混乱が生じていたことを示唆している。性質の違いによって資料の保存状況に差が生まれることは，ややもすれば当たり前のことであるが，実際の調査を通じてこのことを再確認できた経験は，今後の調査を見据えたとき，貴重な成果の一つであるといえよう。

計画通り報告書資料を一通り収集し終えたあと，引き続き国防史編纂局にて，同時代人の寄託文書を調査した。寄託資料とは，公文書と異なって組織的に保存される文書ではないため，文書が存在するかどうかには運が付きまとうが，職務中に書き残された「公的」な文書では見ることのできない，同時代人の「私的」な証言を，現代の私たちまで伝えてくれる可能性を有する。幸運なことに，今回の滞在中に，1958 年-1960 年までの 3 年間をワルグラで過ごした，アルシモル大佐の寄託文書を発見することができた。本報告時点では十分に目を通すことができていないが，同文書の中にはワルグラ住民の中の有力者との直接的なやり取りを示すメモ類の存在をいくつか確認しており，これらの資料を報告者が行ってきた分析結果と突き合わせることで，想定外の結果が得られる可能性がある。

また，滞在期間中にはフランス国立科学研究センター (CNRS)研究員でアルジェリア近現代史家シルヴィ・テノー氏のもとを訪問した。同氏からは，報告者の研究である植民地体制下におけるサハラ地域のアルジェリア編入の問題について議論するとともに，歴史学研究の重要な作業となる資料収集にかんする手ほどきを受けることができた。ここでの議論を通じ，今後，報告者の研究を発展させるためには，アルジェリアでの資料収集およびサハラ砂漠でのフィールド調査を実施する必要があることを再認識することができた。

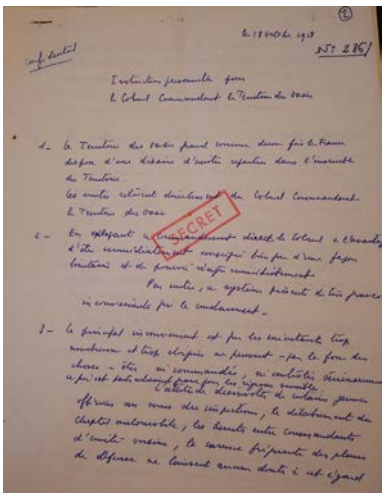

図 1. 収集した一次資料からは，ワルグラの統治を巡る駐在官同士の生々しいやり取りが窺える。

図 2. 国防史編纂局閲覧室